

印刷白書2007に見る印刷産業の40年

二〇〇七年はJAGATにとって創立四十周年という節目の年であり、『印刷白書2007』では、次の時代の印刷産業を考える材料として、過去四十年間の印刷産業、デジタル化に至る技術の変遷をまとめている。(第2部ヒストリーブックより抜粋)

デジタル化で構造変化

高度成長から成熟、縮小へ

JAGAT創立の年でもある一九六七年という年は、革新知事の最初である美濃部亮吉の東京都知事選挙当選、第二次佐藤内閣の発足、そして吉田茂元首相の死去、海外ではE.C.(欧州共同体)発足、A.S.E.A.N.(東南アジア諸国連合)結成、さらに公害対策基本法公布と、今の社会につながる流れのいくつも生まれた年であった。世相では、石原裕次郎の「夜霧よ今夜も有難う」がヒットし、「あしたのジョー」(週刊少年マガジン)が連載を始め、野坂昭如は直木賞を受賞している。

そして、一九六八年には国民総生産(GNP)が資本主義国家の中で第二位に達している。戦後日本経済が急成長した高度成長期の真っ只中であったわけである。

それから四十年。今は世紀をまたぎ、二十一世紀となっている。

一九六七年という年ひとつを見ても、現在に至る大きな布石のいくつもが読み取れるように、この四十年を「今」改めて振り返って

印刷需要に対応するための大きな貢献をした。それが一九九〇年代に入り一変、帶給関係は供給力過剰に転じ、プリプレスのデジタル化は印刷産業の成長を加速してきたプリプレスの付加価値を大きく減らすよう働き、印刷産業の長期低落をもたらしてきたのである。そしてさらに、今まさに巻き起こっているデジタル化とネットワーク化、そしてクロスメディア化への動きは印刷のみならず広くメディア全体に共通する変化であるという点である。従って、これがもたらす構造変化は、印刷産業を含むメディア全体において広がるものとして見るべきである、という点である。

しかしこの流れに対応しないうちは、業態として括られたビジネス・サービス化は成果を得る段階にはまだ至らず、中小印刷業

におけるソフト・サービスの高は努力が実り始めていたと言え、依然二%にも達しないのである。俯瞰して見れば見るほど「環境」が激変していることに気づくわけで、時間の流れに沿って言うならば、既に印刷を載せる土台は「違うパラダイム」にシフトをしていたという点なのである。

進化を選択するための、ジャンプをしなければ長い年月の中で培ってきた「印刷」という価値を、印刷業が自ら継承し続けることすら危うくなるという点である。マクロトレンドでは成熟から縮小に転じ始めていたのでは、印刷産業には少なくともはや「成長を維持できない」ということは明白である。

一方、印刷物需要自体を示す紙の出荷販売量を見る。一九九五年から二〇〇五年までの十年間で八・六%増になっている。年率換算では〇・八%の伸びである。また、印刷の仕事量と関連する平版インキの出荷販売量は五〇・六%増(年率四・二%増)になっている。つまり、印刷物需要自体および印刷の仕事は増加していたことが分かる。紙の伸びとインキの伸びの対比からは、カラー化がさらに進んだことを明確に示している。

以上のように、印刷物需要自体は増加したが、プリプレスの付加価値低下と供給力過剰による価格低下によって印刷産業の規模は一九九一年以降縮小に向かっている。二〇〇五年までに出荷額は二〇・三%減、事業所数は二四・二%減、従業員数は三三%減になった。事業所数、従業員数規模は三十年前の一九七五年時点とほぼ同じ規模、出荷額は十七年前の水準に逆戻りしている。

この十年で急速に上昇している。プリプレスのデジタル化、印刷機の多色化と省人化、そしてオフセットの増加などによるものである。技術進歩は利権を減らす技術の進歩は、供給力不足の時代には、印刷市場、印刷産業の拡大に寄与したが、その状況は一九九〇年代に入ってから一変した。先に述べたように、帶給関係は供給力過剰に転じ、プリプレスのデジタル化は印刷産業の成長を加速してきたプリプレスの付加価値を大きく減らすよう働き、印刷産業の長期低落をもたらしている。

技術の進歩による影響として忘れてならないことがもう一つある。それはデジタル技術に関することだが、技術の進歩はそれがもたらす価値を減らすという側面もある。このことは、例えばWebについて考えれば明らかである。Webが出現したところ、ホームページの制作単価はいくらだったのだろうか。そして、それが三年、五年と経つにつれて急速に価格が低下したことは記憶に新しい。

技術変化がもたらした産業の構造変化

上記のような過去四十年間の変化は、印刷産業の構造にも大きな変化をもたらした。製版業は、一九八〇年代前半まで印刷業を超越する伸びを達成して印刷業内のシェアを拡大していった。印刷物需要は一九七〇年代後半には、熟練活版工の不足、印刷現場の生産性向上とカラー印刷需要への対応のために、ホットメタルからコールドタイプへ、凸版印刷から平版印刷に移行した。

一九七〇年まで、印刷物生産は熟練作業者の技能に頼らざるを得ない部分が多かったが、印刷分野では、エレクトロニクス技術を採用した技術によって品質の安定化・向上、脱技能化、省人化が図られてきた。製版分野では、一九八〇年以降の電子化によって脱技能化と生産性の大幅な改善がなされた。

一九七〇年を基準点とした印刷物生産における物的労働生産性は三十五年間で二・五倍、通し数ベースでは五・二倍になっている。通し数ベースの生産性は特に

両刃の剣の技術進歩

プリプレスの付加価値低下

カラー化で伸びた印刷産業出荷額は、一九七〇年前までは主に印刷物需要自体の増加によるものであるが、一九七〇年代以降はカラー化と小ロット化の進展によってもたらされた。その状況は、紙、平版インキ、製版印刷用フィルムの出荷販売量の推移を見れば明らかである。一九七〇年から一九九〇年までの二十年で見ると、紙の出荷販売量は二・三倍、平版インキは三・三倍伸びているが、製版印刷複写用フィルムはそれをはるかに上回る七・四倍に伸びている。紙の需要は印刷企業が生産能力を上げても需要をまかない切れず、新しい企業が続々と生まれ供給力不足を補ってき

同じ勢いで拡大したという点である。一方、プリプレスの付加価値は、多色化と小ロット化の進展によって紙需要の三倍以上で伸び、これが印刷産業の出荷額のGDP弾性値を一・二に押し上げた。印刷業拡大の基盤は人口と経済発展だが、国の経済を上回る勢いで拡大したのは、需要変化に伴うプリプレスの付加価値増大によるものであった。

供給力過剰は、当然のことながら過当競争を生み出し価格下落をもたらした。JAGATの推計によれば、過去十五年における価格下落率は二〇%と計算されている。デジタルを基盤として技術の進歩は年々加速しているが、市場の伸びは今後も一%強と見られており、印刷産業の供給力過剰はかなり先まで解消しないだろう。

両刃の剣の技術進歩

過去四十年続いた技術の進歩は、一九九〇年までは増大する印刷需要に対応するために大きな貢献をした。印刷物需要の爆発的な拡大が明確になった一九六〇年代後半には、熟練活版工の不足、印刷現場の生産性向上とカラー印刷需要への対応のために、ホットメタルからコールドタイプへ、凸版印刷から平版印刷に移行した。

一九七〇年まで、印刷物生産は熟練作業者の技能に頼らざるを得ない部分が多かったが、印刷分野では、エレクトロニクス技術を採用した技術によって品質の安定化・向上、脱技能化、省人化が図られてきた。製版分野では、一九八〇年以降の電子化によって脱技能化と生産性の大幅な改善がなされた。

一九七〇年を基準点とした印刷物生産における物的労働生産性は三十五年間で二・五倍、通し数ベースでは五・二倍になっている。通し数ベースの生産性は特に

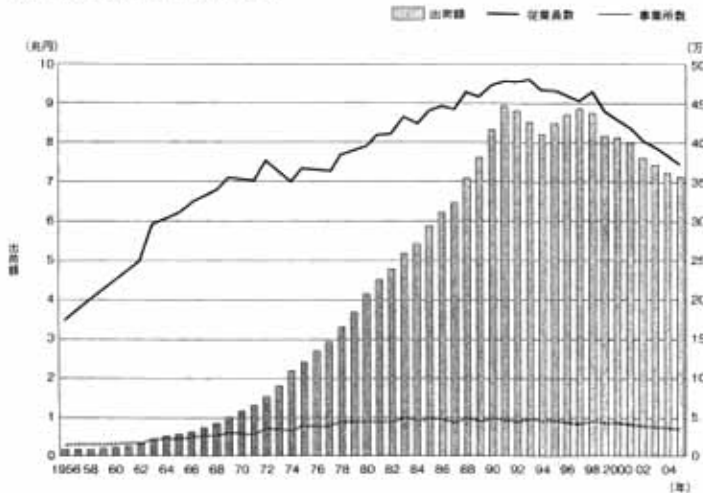
技術変化がもたらした産業の構造変化

上記のような過去四十年間の変化は、印刷産業の構造にも大きな変化をもたらした。製版業は、一九八〇年代前半まで印刷業を超越する伸びを達成して印刷業内のシェアを拡大していった。印刷物需要は一九七〇年代後半には、熟練活版工の不足、印刷現場の生産性向上とカラー印刷需要への対応のために、ホットメタルからコールドタイプへ、凸版印刷から平版印刷に移行した。

一九七〇年まで、印刷物生産は熟練作業者の技能に頼らざるを得ない部分が多かったが、印刷分野では、エレクトロニクス技術を採用した技術によって品質の安定化・向上、脱技能化、省人化が図られてきた。製版分野では、一九八〇年以降の電子化によって脱技能化と生産性の大幅な改善がなされた。

一九七〇年を基準点とした印刷物生産における物的労働生産性は三十五年間で二・五倍、通し数ベースでは五・二倍になっている。通し数ベースの生産性は特に

印刷業の出荷額と従業員数・事業所数の推移



資料 経済産業省 (工業統計局)

この二十年、日本の実質GDPは二・八〇年代前半まで続いた。しかし、一九八〇年代後半に入ると、半に入ると必要の伸び率は七%程度になり既存の企業が生産力強化によって十分需要をまかない切れず、新しい企業が続々と生まれ供給力不足を補ってき

供給力過剰は、当然のことながら過当競争を生み出し価格下落をもたらした。JAGATの推計によれば、過去十五年における価格下落率は二〇%と計算されている。デジタルを基盤として技術の進歩は年々加速しているが、市場の伸びは今後も一%強と見られており、印刷産業の供給力過剰はかなり先まで解消しないだろう。

供給力過剰は、当然のことながら過当競争を生み出し価格下落をもたらした。JAGATの推計によれば、過去十五年における価格下落率は二〇%と計算されている。デジタルを基盤として技術の進歩は年々加速しているが、市場の伸びは今後も一%強と見られており、印刷産業の供給力過剰はかなり先まで解消しないだろう。

供給力過剰は、当然のことながら過当競争を生み出し価格下落をもたらした。JAGATの推計によれば、過去十五年における価格下落率は二〇%と計算されている。デジタルを基盤として技術の進歩は年々加速しているが、市場の伸びは今後も一%強と見られており、印刷産業の供給力過剰はかなり先まで解消しないだろう。